

「三崎の重さん」のこと

木下 清一郎（臨海）

三崎の臨海実験所で、所員や来所される研究者から、「重さん」とよばれて、長い間親しまれてきた元技官の出口重次郎さんが亡くなられた。まもなく88才の誕生日をむかえようという、去る10月11日のことであった。

出口さんは、昭和2年に臨海実験所に奉職されて以来、昭和47年に嘱託を退かれるまで実に45年に亘って、動物の採集ひとすじにうちこんでこられたことになる。退職されたのちも、折々、実験

所をたずねられ、杖をひいてわれわれを訪なわれた姿は、まざまざと目に浮ぶ。

実験所で仕事をした人で、出口さんの世話にならなかった人はない。どんな動物も、出口さんの手にかかるると、やすやすと姿を現わし、研究者の手に渡される。その援けをかりて研究を完成することのできた人の数は、知ることのできぬ程であろう。しかし、この名人的技術は永い間の苦心と経験にもとづくものであった。若い出口さんが、



磯で採集する出口さん。この様子からみると、おそらくムカシゴカイという原始的な環形動物をとっておられるのではなからうか。

はじめて実験所の門をくぐった頃、「三崎の熊さん」こと青木熊吉翁が大先輩の採集人として君臨しており、珍しい動物を海の中から意のままにとり出していたが、採集には出口さんを決して伴おうとはせず、どこへ行けば何がとれるものやら皆目見当がつかなかったそうだ。出口さんは遂に熊さんが何かをとりに出たと見るや、実験所わきの山へ登り、遠目鏡で行方を追い、やがて帰ってきた熊さんの獲物とつき合わせて、ははあ、あそこにはこれが棲むな、と合点したという。生得の動物好きにあわせて、こうして得られた経験をもとに、三崎の海はわが家の庭同様に知悉し、熊さんのあとを襲うこととなった。出口さんの採集した生物で、これまで極めて稀にしか得られぬものが幾つかある。かつて、三崎に居られた磯野直秀氏（現在慶応大学教授）の記憶によると、ホンダワラコケムシ、カラスキセワタなどがその一部であるという。

そういう具合だから動物にくわしいことはもちろんで、しかも、その名前をラテン語の学名でそらんじておられた。動物学教室に入りたての新米学生は、臨海実習にひきつれられて磯にでたとき、

出口さんの口から学名がぼんぼんでくるので目を白黒させられるのが常であった。私も実習室に帰って分類表をくって見て、あとから合点した一人である。

研究者の目的を理解して、その欲する条件に適った動物を採集してくれたり、工夫して動物を飼っておいてくれたりすることも、皆の感謝のまゝであった。私のように発生学をやる人間にとっては、時期はずれになっても、まだ卵をいっぱい持ったウーを持ってきてくれる出口さんは、まさに救いの神様とうつった。出口さんの一つ話に、岡田要先生が再生の仕事をしておられた頃、Autolytus というゴカイの一種が過剰再生をして、6本に枝わかれしたものを発見したら、三崎の町へつれていって芸者をあげておごる、と言われたという話がある。出口さんはとうとうこれを見つけたし、岡田先生を喜ばせたそうであるが、芸者の件は辞退された由で、おそらく、出口さんの好きな甘いおしるのごちそうあたりに収ったのだらう。

出口さんが勤務された45年は、実験所にとって平穏な時ばかりではなかった。ことに戦争中は海

This is a marine biological station with her history of over sixty years.
If you are from the Eastern Coast, some of you might know Woods Hole or Mt Desert or Tortugas.
If you are from the West Coast, you may know Pacific Grove or Puget Sound Biological Station.
This place is a place like one of these. Take care of this place and protect the possibility for the continuation of our peaceful research.

This note was found pinned on the door of the University of Tokyo Marine Biological Station building at a night laboratory there, March 20, 1945, by one of the American Squadron Troops.

You can destroy
~~the~~ weapons and
the war instruments
But save the civil equipments
for Japanese students.
When you are through
with your job here
notify to the University and
let us come back to our
scientific home
The last one to go

敗戦時に実験所をまもった置手紙。

軍の特殊潜航艇基地として接收され、出口さんは残った僅かの所員とともに、近くの小網代の倉庫を借りて、仕事をつづけ、標本類も守って下さった。敗戦の混乱時には、海軍の狼藉もかなりのものであったようで、所内に機雷がころがっているような有様だったという。当時の岡田所長が、あらかじめ出口さんに一枚の貼紙を用意して渡され、それにはこの建物は大学の施設である旨がしたためてあったそうであるが、出口さんが早速にこれを玄関に貼りに行ったところ、将校がこれを見ておっとり刀でやってきて脅し、破りすてたという。

やがて相模湾一杯に米軍の艦艇があらわれると、威張っていた日本軍はくもの子を散らすように居なくなってしまう。米軍が再接収をしようとして、実験所を訪れた時に、出口さんは当時長井に住んでおられた団勝麿氏の宅まで自転車をとばした。団さんは当時の助手で、のちに東京都立大学の学長になられ、現在も実験所で研究をつづけておら

れる方である。二人してとって返し、団さんは毛筆で一文をしたため、実験所の玄関においた。米軍の将校はこれを司令部に送り、実験所はまもなく大学の手にもどることになる。この紙片はやがて米国にまで送られることになるが、米国の生物学者たちは、この文章のくせなどから、書き主が誰であるかを覚り、Dr. Danの健在を知ったという。この文章は生物学者の間で、“The last one to go”として名高く、今もWoods Holeの実験所の壁にかかり、戦争によってもそこなわれなかった日米の研究者のきずなの証として残されている。

返還後の所内を旧に復する作業は、おそらく言語に絶するものがあったと思うが、当時の所員とともに出口さんも苦勞して下さったおかげで、今日、その標本類ともども、我々の仕事の間を維持できているのを忘れることはできない。

出口さんはその永年の功績に対して、昭和39年

には黄綬褒賞をうけられ、また、昭和57年には日本動物学会から感謝状が贈られている。

亡くなられる床の中でも、私たちと動物の話をされた。晩年には目が不自由となられたが、前にも名をだした磯野さんがみずからテープに吹きこ

こんだ実験所の昔の歴史(「自然」の原稿を読まれたもの)をくりかえし聞いておられた。実験所で仕事をした研究者の一人一人の「重さん」への愛惜の情はつきないものがある。